「令和７年度高知県アレルギー疾患医療連絡協議会」

開催日時：令和８年３月 24 日（火）18:30～20:00
場所：高知県庁２階　第二応接室（ハイブリッド開催）
出席委員数：14 名、傍聴者数：１名
議題一覧
1　国及び本県におけるアレルギー疾患対策について
2　高知県アレルギー疾患医療拠点病院における業務について
3　その他

「国及び本県におけるアレルギー疾患対策について」

・（委員）おおむね厚生労働省の指針に沿って県でも取り組んでいると思う。また令和６年度の本協議会で議題にあがった学校生活管理指導表（アレルギー疾患用）の統一化についても進んでいると感じたとの意見があった。
・（委員）県栄養士会として、イベントや講習会で、アレルギー対策の約 30 品目の防災備蓄食品を展示していた。2 年ほど前から日本栄養士会の助成金を受け、根菜汁やホワイトシチュー、ミキサー粥、米粉を使った山菜のうどん、ミネストローネを購入した。毎年 30 袋から 40 袋ずつ購入しており、2026 年も購入を予定している。2026 年度の県栄養士会の取組として、こうちアレルギー疾患情報サイトに県栄養士会が備蓄している食物アレルギー対応食品を掲載したいと考えている。掲載することで、食物アレルギー疾患の患者や家族の個人備蓄の参考になるのではないかと思うとの意見があった。
・（委員）こうちアレルギー疾患情報サイトにアップデートされれば、県民の方の理解が深まると思う。併せて個人備蓄を推進する必要があるとの意見があった。
・（委員）大学病院へ食物負荷試験に来られた食物アレルギー患者さんに備蓄状況を調査したところ、備蓄をしていない方が約 14%あり、備蓄をしている方でもお水とアルファ米のみでおかずを持っていない方が多いことがわかった。引き続き大学の栄養士とともに個人備蓄を警鐘したいとの意見があった。
・（委員）昔と異なり、将来のアレルギーや喘息を防ぐためにも肌をきれいにしておく、できるだけ皮膚に傷を作らない、皮膚を悪化させないことが大事であると言われている。出産前の訪問やプレママ・プレパパ教室の際には、皮膚の清潔や保湿について伝えており、赤ちゃん訪問の際に、肌ががさがさしていたり、耳が切れているといった場合には「赤ちゃんの湿疹対策」の冊子を渡している。赤ちゃんの湿疹対策の冊子は情報量が多すぎず、見開きで分かりやすいと感じているとの意見があった。

・（委員）県は化学物質過敏症の窓口を作っているが、子どもの化学物質過敏症に特化した窓口はない。小児は大人と比較して、軽症の場合が多いが、小児で問題になるのは学校に行けるかどうかである。柔軟剤を使用する家庭が多く、化学物質過敏症の子は給食の白衣が身につけられないことがあるため、白衣は学校で一括して洗濯してほしいとの意見があった。
・（委員）化学物質過敏症の現状把握と啓発がよりあればよいと思うとの意見があった。
・（委員）息子にも食物アレルギーがあったため、給食のエプロンはマイエプロンを貸してもらっていた。アレルギーをもつ親の会の会員にも化学物質過敏症の子を持つ方がおり、学校に通えなかったり、頭が痛かったり、先生が洗濯した衣類に反応してしまう子がいた。学校側としても家庭のことになるので対応が難しいといった現状があり、窓口が新たにできればよいと思うとの意見があった。
・（委員）学校生活管理指導表は県下全体で統一する方向に進んでいるのか質問があり、（保健体育課）実施した調査では、6市町村/34市町村が独自の様式を使用している。市町村教育委員会をとおして、栄養教諭等に周知を行い、できるだけ様式の統一化を図っていきたいと回答した。
・（委員）学校生活管理指導表の項目に「プールをしていいか」との項目があり、患者さんからは「プールに入るとかゆくなる」と言われるが、それを認めて本当に悪くなるか分からない。記載に悩むが記載する医師のお任せでよいのかとの質問があり、（保健体育課）学校としては医師の意見のもと対応しているため、生徒、保護者と話していただいたうえで記載していただきたいと回答した。
・（委員）学校生活管理指導表の記載がうまくできておらず、アレルギー食品を摂取し一大事になったという事例を聞いているため、統一化を目指してほしいとの意見があった。

「高知県アレルギー疾患医療拠点病院における業務について」

・（委員）高知大学のアレルギーチームが主になって委託業務を進めているが、スタッフみんながやる気のある方が多い。PAEは小児アレルギーエディケーター、CAIがアレルギー疾患管理指導士の略であり、PAE、CAIを増やすため研修を実施している。アレルギー教室は、個人的に面白いと思っており、より多くの方に参加してほしい。また、セミナーでは、小児科や眼科等他科の医師の話を聞くことができ、アレルギーの理解を深めるのに良い機会だと思うとの意見があった。
・（委員）参加した移行期医療の研修会が有意義であったとし、その広報方法について質問があった。高知大学（拠点病院）から病院のウェブサイトやチラシ、および各師会へのチラシ（約1,000部）配布を通じて広報活動を行ったことを説明した。また、アレルギー疾患拠点病院に限らず、他の拠点病院事業においても広報を行っても参加者が集まりにくいという現状があることを補足した。

・（委員）県医師会の後援があれば医師会報への掲載ができる。小児科医会では、作成しているメーリングリストで研修の周知ができるため、各医会にも当たってみることで、広報がより充実するのではないかとの意見があった。
・（委員）看護協会の研修に拠点病院（高知大学）から講師に来てもらことができれば、看護師に広まっていくと思うが可能だろうかと質問があり、拠点病院（高知大学）から検討する旨回答した。
・（委員）令和７年度のアレルギー教室は高知大学に通院している患者と保護者のみだったが、アレルギーを持つ親の会の委員からも「教室に参加してみたかった」との意見があったため、遠方の方が参加しやすいようオンラインで実施したり、２回ほど開催してもらえるとよいと思う。また、年齢に応じて生じる問題が異なるため、小さなお子さん向けや小学生、中学生向けなど対象を分けて開催してもらえるとよいとの意見があった。
・（委員）研修はオンデマンドでも配信しているのかとの質問があり、拠点病院（高知大学）から全ての研修ではないが、２月４日に開催した研修は現在オンデマンド配信をしていると回答した。
・（委員）こうちアレルギー疾患情報サイトの広報が全くないため、乳幼児健診の際にチラシを配布するなどして、周知してもらえるとよいと思うとの意見があった。
・（委員）拠点病院が開催するハンズオンセミナーに参加し、A 医療機関の看護師さんと知り合うことができた。薬を変えても治らなかったお子さんのお母さんが市役所に相談に来ており、A 医療機関を紹介したところ、１週間経たずにきれいになった様子を見せに来てくれた。ただ、A 医療機関には 30 分程度かかるため、看護職の方に勉強していただき、身近な場所で相談やホームケアを習うことができればよいとの意見があった。
・（委員）院内での連携体制について質問があり、委員から、アレルギー関係の科は、眼科、耳鼻咽喉科、呼吸器科、皮膚科があるが、皮膚科は常勤でなくなったため、連携が取りにくくなっている。ただ、医局が一つにまとまったところにあるため、フランクに相談できる体制であり、気になる患者さんがいれば堅苦しい紹介状を通さなくても対応できる状況になっている。

「その他」

・（委員）学校で起こるヒヤリハット事例を個人情報を出さない形で、共有・検討する場があるのだろうかとの質問があり、保健体育課から、誤食の事例があれば、課に報告が来るようになっているため、件数の把握等はできている。講習の開催や栄養教諭、校長先生への注意喚起等は行っているが、事例の共有等は行えていないとの意見があった。
・（委員）学校で起こったことが保育園や幼稚園でも関係することであれば、保育園や幼稚園も事例を知っておくことで、誤食が起こりにくくなるのではないかとの意見があった。
・（委員）学校側では症例を把握しているようだが、予防策を検討する場が必要だと思う。

本協議会に小委員会のようなものを立ち上げて、小児科で食物アレルギーを診ている医師と学校関係者に集まってもらい、予防策を検討することで誤食が少なくなるのでなないかとの意見があった。

・（委員）教育委員会は事例を共有してもらえるのかとの質問があり、保健体育課から個人情報以外であれば、どういうケースでどういう食べ物で誤食が起きたかという情報は提供することができるとの回答があった。

・（委員）教育委員会が事例を出してくれるのであれば、県医師会の中に学校保健委員会があるため、委員会の中で話をすれば、郡市医師会の学校医にも伝わる可能性はあるとの意見があった。

・（委員）一般の人も見れるよう情報開示をしてもらえれば、アレルギー疾患を持つお子さんのお母さんたちは「こういうことに気をつけないといけないから、先生と話をしよう」と予防ができるため、ヒヤリハット事例について具体的に教えてもらいたいとの意見があった。

・（保健体育課）全ての県民に対して公開するかどうかは、今答えることはできないが、医師会等を通じて広く周知していきたいとの意見があった。

・（委員）個人情報保護のため、ある程度多い事例がいいのではないかと思う。こうちアレルギー疾患情報サイトに掲載してもよいのではないかと思うとの意見があった。